

鉄鋼

10月全国粗鋼生産 前月比6.4%増

9月末の普通鋼鋼材国内在庫（メーカー・問屋段階）は、前月末比0.8%で2カ月ぶりに減少し、在庫率は前月末比17ポイント低下し121.1%となった。流通在庫は前月末比0.9%増と9カ月ぶりに増加した。10月の全国粗鋼生産は前月比6.4%増と2カ月ぶりに増加し、年換算1億360万トンで9月に比べ約8,000トン増加しピーク時の9割弱まで回復した状況である。経済産業省集計の10～12月の粗鋼生産計画は、前期実績を10.5%上回る2,677万5,000トンとなった。国内高炉大手4社が発表した2009年度の中間決算と通期の業績見通しによると、4～9月期連結業績は4社そろって経常赤字となったが、7～9月期では生産販売数量が予想以上に回復しJFEHDが2四半期ぶりに黒字転換した。JFEスチールとインドの民間大手鉄鋼メーカーJSWスチールは戦略的包括提携契約を締結したと発表し、これにより日本の高炉大手のインドでの提携パートナーが決まり進出計画が出揃った。10月の世界粗鋼生産量（66カ国）は、中国の生産好調など最近の生産回復の動きを受けて前年同月比13.1%増の1億1,218万トンとなり、14カ月ぶりに前年同月実績を上回った。

◆10月生産、前月比6.4%増

日本鉄鋼連盟が発表した9月末の普通鋼鋼材国内在庫（メーカー・問屋段階）は、前月末比3万7,000トン、0.8%と微減の462万2,000トンになり、2カ月ぶりに減少した。在庫率は前月末比17ポイント低下して121.1%となった。また9月末の流通在庫は、鉄鋼連盟が行なった全国市中鋼材数量調査によると、前月末比0.9%増の259万3,000トンで9カ月ぶりに増加した。9月の販売量は前月比7.2%増の247万7,000トン（前年同月比では17.2%減）で在庫率は6.5ポイント低下して104.7%となったが、いまだ1カ月割れには達していない。

主要品種の在庫状況をみると、9月末の薄板3品（熱延・冷延・表面処理鋼板）の国内在庫（メーカー・問屋・コイルセンターの合計）は、前月末比6万2,000トン減の342万9,000トンとなった。前月は8月という季節要因で一時的に増加したが、年初からの減少トレンドは続いている。在庫率も前月末の2.20カ月から2.06カ月に低下し、メーカーでは適正水準に近づいているとしている。主要建材製品であるH形鋼の10月末の全国流通在庫は、新日鉄系建材特約店組織である「ときわ会」の調査によると、前月末比1.4%、3,200トン増の23万2,100トンとなった。例年では需要期にあたるが、引合いや荷

動きが依然として低調で在庫増となった。

日本鉄鋼連盟が発表した10月の鉄鋼生産実績によると、全国粗鋼生産は前月比6.4%増の880万トンと2カ月ぶりに増加した。前年同月比では12.9%減で13カ月連続してのマイナスとなったが3カ月連続して800万トン台を上回った。10月の1日当たりの生産量は約28万4,000トン（年換算1億360万トン）で、9月に比べると約8,000トン増加した。1～10月の累計生産量は6,972万トンで、夏場以降回復傾向が鮮明になっているが、累計では前年同期比を32%下回っている。自動車など製造業向け需要が底打ちしたのに加え、東アジアをはじめ海外向け需要が好調だったことで、ピーク時の9割弱まで回復した状況になっている。

財務省が発表した10月の鉄鋼貿易統計によると、輸出（全鉄鋼ベース）は前年同月比14.6%増の339万8,000トンと3カ月連続で前年を上回った。ただ、9～10月にアジア市況は軟化基調へ転じたことから、前月比では15万トン減と6カ月ぶりに減少した。10月の全鉄鋼輸入は同35.2%減の51万7,000トンと前年割れが続いているが、数量は前月から約15万トン増加している。国別輸出では、最大向け先の韓国・台湾のアジアNIEs諸国向けが143万トン（前年同月比40.1%増）と大幅増だったが、中国向けが55万9,000トン、ASEAN向けは84万トン（同2.4%減）と伸び悩んだ。アジア以外では、中東向けが11万3,000トン（同47.7%増）、米国向けが13万3,000トン（同7.2%減）、EU向けが2万9,000トン（同1.1%増）、ロシア向けは1万1,000トン（同2.8倍）だった。

◆10～12月粗鋼生産計画、2,678万トン

鉄鋼メーカーが策定した10～12月の粗鋼生産計画を経済産業省が集計したところ、前期実績を253万8,000トン、10.5%上回る2,677万5,000トン（前年同期比37万8,000トン、14%増）となった。同省が策定した需要見通しの2,528万トンを149万5,000トン、5.9%上回る。

普通鋼輸出向けはアジア向けが牽引し、約692万トンと過去最高水準に達するが、国内では自動車向けに加え、建設機械でも需要増の傾向が出始めているが、普通鋼鋼材の国内向け生産計画は前年同期と比べると約200万トン（約15%）少なく本格的回復とはいえない状況にある。粗鋼生産は前期に比べると高炉が約210万トン、普通鋼電炉が約22万トン、特殊鋼電炉が約22万トン増加する。しかし生産計画通り推移しても、2009暦年の粗鋼生産量はリーマン・ショック後の世界同時不況によって鉄鋼生産にも大きく響き、8,770万トン（前年比26.2%減）と

なり、1999年以降の1億トン割れとなるほか、1970年以降では最低の水準に落ち込む。

◆高炉大手4社中間決算、そろって赤字

新日本製鉄、JFEホールディングス、住友金属工業、神戸製鋼所の高炉大手4社は2009年度の中間決算と通期の業績見通しを発表した。それによると、4～9月期連結業績は大幅な数量減と単価下落に加えて、原料のキャリアオーバー（前年度契約の高価格原料の入荷）や在庫評価損など一過性のマイナス要因も影響し、4社そろって経常赤字となった。ただし、7～9月期は自動車向けやアジア向け輸出で、薄板類を中心に生産販売数量が予想以上に回復し、JFEHDは2四半期ぶりに黒字転換して98億円の経常利益を確保した。新日鉄、住金、神鋼の3社は7～9月期も経常赤字ながら、従来予想比では赤字幅が縮小した。

通期見通しでは、新日鉄が連結経常利益を前回4月時点の暫定見通しであるゼロから200億円の黒字に上方修正し、JFEHDは前回据え置き400億円の黒字、神鋼は経常赤字額を250億円から200億円に縮小すると見通している。住金は「鋼管事業における需要が緩やかなものに止まることや、持分法適用会社の収益悪化」などから経常赤字幅が50億円拡大して450億円になるとの見通しを発表した。

◆JFES、印鉄鋼大手と包括提携

JFEスチールとインドの民間大手鉄鋼メーカーのJSWスチール（本社：ムンバイ）は、11月19日に戦略的包括提携契約を締結したと発表した。提携対象はインドでの自動車鋼材分野を第1弾として、広範囲にわたる分野での協力を検討する。自動車鋼材では、熱延・冷延・溶融亜鉛めっき鋼板の製造技術の供与、原板供給、自動車ユーザーへの応用エンジニアリングや製品開発を含む共同サービスの実施などを行なう。両社はさらに、①自動車用鋼材以外の鉄鋼製品製造、②省エネ分野、③環境対策、④品質・歩留まり改善、⑤JSWの設備能力診断、⑥各種指標のベンチマーキング化、⑦インド内外における原料調達、⑧JSW社が計画中的ウエストベンガル製鉄所プロジェクトへの相互出資——などの協力を検討する。

JSWの粗鋼年産能力は780万トンで、インド南西部カルナタカ州のビジャヤナガール製鉄所は2009年前半に第3高炉（内容積4000m³）を立ち上げており、第4高炉が操業する2011年には年産粗鋼能力を1,100万トンに拡大する。また、2020年までにウエストベンガル州、ジャ

表-1 高炉大手4社の2009年9月中間期連結業績と通期見通し

		(単位：億円)		
		売上高	経常利益	当期利益
新日本製鉄	09年9月期	15,733	△869	△718
	08年9月期	26,021	2,622	1,616
	10年3月期	35,000	200	0
J F E H D	09年3月期	47,698	3,361	1,550
	09年9月期	13,067	△574	△286
	08年9月期	21,031	2,586	1,530
住友金属	10年3月期	28,200	400	240
	09年3月期	39,082	4,005	1,942
	09年9月期	5,987	△476	△466
神戸製鋼所	08年9月期	9,813	1,517	920
	10年3月期	12,900	△450	△500
	09年3月期	18,444	2,257	973
神戸製鋼所	09年9月期	7,881	△442	△453
	08年9月期	11,917	855	462
	10年3月期	16,350	△200	△350
	09年3月期	21,772	608	△314

ルカンド州にそれぞれ1,000万トンの新規一貫製鉄所を完成させて粗鋼能力を3,200万へ引き上げる計画を有している。

本提携を受けて、JSWは「拡張プロジェクトの新たな展望を開き、上工程を中心に一貫鉄鋼生産体制の拡充を図りたい」とし、JFESは「インド市場において生産を拡大する自動車会社の調達要請に応えるとともに、インド市場での成長戦略を強力に加速したい」としている。この提携によって、新日本製鉄—タタ製鉄、住友金属工業—ブーシャン、神戸製鋼所—エッサールと合わせて日本の高炉大手のインドでの提携パートナーが決まり、進出計画が出揃った。

◆10月の世界粗鋼生産、14カ月ぶり増

世界鉄鋼協会のまとめによると、10月の世界粗鋼生産量（66カ国）は前年同月比前年同月比13.1%増の1億1,218万トンとなった。前年同月実績を上回ったのは、2008年8月以来14カ月ぶりである。2008年10月は金融危機が表面化した直後で、鉄鋼生産が急減した月である。

2009年10月は、中国の生産好調など最近の生産回復の動きを受けて、前年実績に比べて2ケタ増となった。10月の中国の粗鋼生産は5,175万トン（前年同月比42.4%増）と5千万トンの大台を突破し、EU27（同12.1%減）、米国（同12.4%減）、日本（同12.9%減）など先進国の伸び悩みをカバーして全体を押し上げた。1～10月の累計生産量は9億8,214万トンで、前年同期比13.5%減となった。10月の生産ペースが続けば、2009年の年間生産は12億トン前後に達する見込みである。◀

(鉄鋼エコノミスト 左近司 忠政)